

まえがき

当時、1 \$は300円で、\$の海外持ち出し限度は3000 \$だった。そして予防注射はコレラと天然痘、アフリカに行く場合は黄熱病が必要だった。つまり、海外旅行は今のよう簡単に出かけられるものではなく、しかも、航空運賃はパリ往復で大韓航空でさえ20万円を超えていた。それでも若者にとって世界への放浪の旅は結構身近な夢でもあった。

植村直己が世界5大陸の最高峰を登頂して「青春を山に賭けて」を著し、また、高校生の放浪者・上温湯青年がサハラをラクダで横断する途中、ラクダに逃げられて死に、その旅行記を母親が「サハラに死す」という名で出版した。当時、始まったばかりのモーニングTVに720というのがある、そこでアジアハイウエーを旅するコーナーがあり、ケンケンがそこでデビューし、テーマソングはあのビューティフル サンデーだった。



私は、今では名門の巣鴨学園高校の山岳部に所属し、卒業してからもOB会をつくって登山に明け暮れた。どこまで登り詰めても終わりのない登山の目標にどこかで終止符を打つべく、我々は海外遠征という大きな目標をつくった。そ

してその偵察隊として1973年、ネパールヒマラヤとパキスタンカラコルムに半年間のトレッキングをした。それが私にとっての初めての海外だった。山も素晴しかったが、世界を覗くことは更に大きな価値だった。

その後、我々は海外遠征を目指して準備するが、結局、この計画は流れた。社会を捨てて山に青春を賭けるのはやはり容易なことではなかったのである。それを機会に山からの引退宣言をした私は自分の存在を見失った。目標のない一日はあまりにも長すぎて重かった。そんなある夜、山の仲間が集まる秋葉原駅の地下の喫茶店で、私はとっさに世界一周に出ようと思ひ立ち、山の後輩である

小畑和雄君に、「途中まで一緒に行かないか」と持ち出すと、「いいっすよ」と彼は答えて、そのたった一言ずつの会話から二人の世界一周がスタートしてしまった。

行くとなれば登山家（やまや）の動きは俊敏で、[FROM TOKYO](#)という題名の計画書をつくり、連日、貧乏生活をして資金づくりをした。

さて、二人のこの行動に[相乗りした](#)者が二人いる。会社の後輩である本多君と、私の彼女の友達であるヒロミだった。本多君はナヨナヨしい男で、普段なら全く入り込みたくない世界を、たまには覗いてみたい衝動にかられたのだ。そしてヒロミはインド人のあの顔に魅せられてのことだった。二人はネパールまで一緒に行き、ネパール料理に慣れない内に帰国した。ヒロミのバックの底には何故かハッシッシが転がり込んでいたそうだが、私がいたずらをして入れたものではない。

その後、小畑君と私は、時には一緒に、時には別々にアジアハイウエーを西に進んで、サハラの玄関口ガルダイヤで別れた。小畑君はそれからモロッコ経由で欧州に飛び、私はサハラを縦断してブラックアフリカに進んだ。

その小畑君がこのサハラ・ザックの編集を引き受けてくれた。40半ばを過ぎて二人とも、当時のことをきちんと残しておきたい欲求にかられたのかもしれない。いや、そうではなくて、きっとまた、青春の熱が沸つ沸つと燃え出してきたからに違いない。

このサハラ・ザックは月間「旅」の旅行記大賞で最終6選まで残った作品で、私はこれをワープロ打ちしてコピーを色々な人に渡してきた。

当時、私は「旅は語ってはいけないものだ」と自分に言い聞かせていた。旅は行動そのものであって、後で語るものではない……。それほどまでに、旅は時間とともにあり、行き当たりばつたりのピュアなものである。今、こうしてサハラ・ザックをデジタルで出版しようとする時、旅とは読むものではなく行動することであって、これを読んで、誰もが旅を始めてくれれば楽しいなあと思うのである。もちろん、小畑君も私もその対象の一人ずつである。